

# 中国における「失独家庭」の周縁化に 関する考察

## —社会的排除の視点から—

MA Menglin

中国では、1979年から2015年12月までの約36年間にわたって「一人っ子」政策が実施された。「一人っ子」政策の長期にわたる実施が、一人っ子世代の増加に伴い、結果として、唯一の子どもを失った、「失独家庭」も急増している。中国では近年、「失独世代」の存在は急速に社会の注目を集めている。

本研究では、「失独家庭」とは、1、主に 1950 年代以降に生まれた者。2、「一人っ子政策」の実施以来、子どもを一人しか産んでいない、または養子縁組は一人しかいない。3、生きていない子どもがいない、または一人っ子が三級以上の障害者であることと定義する。

先行研究によると、現在の中国では、失独者は身体、精神状態、経済状況、人間関係など複数の次元で、社会の中心から「周縁」へ押しやられた兆しが見られる。こうした「失独家庭」の周縁化は深刻な社会問題になっている。しかし、「失独家庭」の周縁化につながる構造は何か、周縁化のプロセスは失独者と社会にどのような影響を与えるのだろうかについて、十分に分析がなされていない。

本研究では、以上の問いから、社会的排除の視点から「失独家庭」の周縁化問題を検討することを目的とする。「社会的排除」概念を用いて、多次元かつ動的なプロセスに着目し、失独家庭が被っている様々な排除現象について排除の構造を明らかにする。

第一章では、「失独家庭」の問題を生じる社会背景と中国における失独家庭の現状について述べ、研究を行う上での問題関心を示した。また、先行文献から「失独家庭」の定義について整理を行った。その後、本研究の目的と意義について説明した。

第二章では、日本、欧米における死別家族への支援、ケアに関する先行研究と社会的排除に関する先行研究および中国の失独者が被る排除の特徴を整理した。「グリーフプロセス」のモデルと「社会的排除」概念を明確にするとともに、失独家庭が被っている排除の特徴を明らかにした。

第三章では、本研究の研究方法与研究結果についての内容である。調査目的、調査内容、分析方法、調査結果など具体的に説明した。

本調査では、中国河南省「一人っ子家庭」で子供を亡くした「失独者」(3名)を対象に半構造化インタビュー調査を実施することとした。調査協力者は女性2名、男性1名であり、年齢は全員50代である。インタビュー内容は、1、基本情報 2、健康状況 3、経済状況 4、仕事との関係 5、人間関係、社会関係(社会的交流、社会的参加、社会的サポート) 6、偏見、差別問題 7、制度 8、将来の不安という8項目を尋ねた。分析方法は修正版グラウンディッド・セオリー・アプローチ(修正版M-GTA:木下、2003)に基づいた。本調査の分析結果は、最終的に25の「概念」、9の『サブカテゴリー』と3の【カテゴリー】が生成された。失独者の周縁化プロセスを死別3ヶ月未満、死別3ヶ月～2年、死別2年以上の3つの時期に基づき、【子どもの喪失体験】、【心理社会的な喪失】、【社会的排除】という3つのカテゴリーに分類された。

分析結果によって、失独の初期段階では、主にショック、苦痛、絶望、自責と罪悪感、現実を受け入れられないなど感情的な痛みに反映された。そして、失独してから2年以内、失独者のグリーフが身体的側面、心理的側面、社会的側面に広がっていた。子どもの喪失は、ドミノ倒しのように、失独者の身体、精神、生活、社会関係全体が大きく変化していることが明らかになった。

さらに、死別2年以上の失独者は度重なる喪失体験によって、文化、社会、政策、経済などの次元から排除されることが明らかになった。失独者は社会システムおよび社会の目に疎外感を感じ、自身が失独について罪や恥の意識を持っていることが窺われた。また、失独者は時間の経過と共に、社会からの排除、孤立に加え、政策の不十分による公的支援の喪失、老後の不安による社会からの疎外を重ねて体験していたことがわかる。これにより、失独者は社会から周縁化されていたことが考えられる。

第四章では、先行研究と本研究の調査結果を踏まえて、失独者の周縁化の創出構造を考察した。そして、失独者の社会的包摂に向けた政策的インプリケーションを提案した。総じて、失独者の周縁化の創出構造には、心理的な周縁化と構造的な周縁化という二形態で現れている。

心理的周縁化とは、親としてのアイデンティティの喪失、価値観の崩壊、相対的剥夺感などの感情により、失独者の社会関係は希薄で、生活各面において脆弱であり、主体的に自ら社会の周縁に追いやるのが考えられる。構造的周縁化とは、親子関係の解体による家族関係からの疎外と、さまざまな社会保障、社会福祉サービスといった社会的支援の未整備による制度上からの疎外と、貧困による経済面における疎外などの構造的要因に加わると、失独者の社会的周縁化はさらに深化していくことが考えられる。

以上の考察により、失独者の社会的包摂について以下の4点の対策を提案した。1点目は、経済面では、政府は失独家庭の状況に応じた支援を構築し、失独者が労働市場へ参入することを支援

すること。2点目は、介護面では、失独高齢者が自宅で老後を過ごせるような環境を整備し、公立の高齢者施設の量を充実し、インフラ建設、質の高い高齢者施設の発展を促進すること。3点目は、心理面では、失独者向けの専門の相談窓口を開設し、ピア・サポートグループを開催すること。4点目は、文化面では、一般市民や企業などへの死別のグリーフケアの啓発活動を行うことが考えられる。

このことにより、失独者の社会的包摂について役立つ対策を提案し、社会の関心を向上させ、今後の失独者の社会参加に貢献するような研究成果につながることを期待できる。